

保育者養成校における領域「表現（造形の分野）」の教授内容と方法に関する研究 —教育実習の内容から養成校における関連科目の指導内容や指導法を探る—

松 下 明 生

1. はじめに

幼稚園教諭になるためには、小学校や中学校及び高等学校の教員と同じく「教育教員免許法及び教育職員免許法施行規則」の教育免許課程認定関連条文に則ったカリキュラムを備えた大学もしくは短期大学などにて学び、単位を取得する必要がある。こういった大学へ夢を持って入学する学生は、保育や教育について学び、そして幼稚園や小学校や中学校にて教育実習を受けるために現場へ出向くことになる。多くの学生は教育実習生として現場の教壇に立ち、初めて先生としての立場になって、困惑し、一部の学生は挫折も味わうことにもなる。机上の学びしか経験したことがない学生が、目の前にいる子ども達とともに毎日を過ごすのである。本稿では幼稚園教員の養成校として、学生のアンケートをもとに、1年次（11月）と2年次（6月）のそれぞれ2週間の計4週間の教育実習について振り返り、今後の授業構成について考察し、改めて考えることにする。現役の大学生が思う学びたい領域「表現」（造形表現の分野）に関する教授内容や、現役の幼稚園教諭・保育士が学生に学んで欲しいと期待する内容と、保護者自身が現在学びたいと考える内容とを比較する。そして保育者養成校としての領域「表現」（造形）の教授内容について、今研究が今後、指導法や内容について考える指標となることを期待する。

2. 短期大学における2回の教育実習について

本学では教育実習や保育実習及び施設実習等の実習を事前事後の指導と併せて実施し、免許や資格取得の必修としている。これらの中でも本稿では教育実習を取り上げて1年次の教育実習Ⅰ（11月実施）と2年次の教育実習Ⅱ（6月実施）直後にそれぞれ同学生に調査を行い、学生たちの学びの意識について探ることとする。2016年度入学生が受けた1年次と2年次の教育実習とは、内容的にどのような違いがあるのだろうか。

実習の内容に関して本学では、以下に定めて、実習の受け入れ園へ向けて周知して頂いている。

*以下抜粋【2017年度（平成29年度）幼稚園教育実習指導に関するお願い】名古屋柳城短期大学

〔A 見学・観察〕

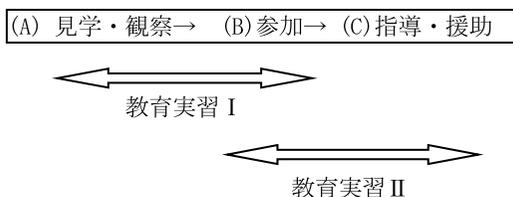
教育実習が有意義に行われるために「参加」「指導・援助」に先立って実習園の環境、設備、幼児の行動、遊び、保育の流れなどの見学・観察などが必要であると思われます。それらを通じて、実習園の保育目標、方法を理解するとともに、子どもを見る目を育てることを目的とします。

〔B 参加〕

指導教諭の指導のもと、子どもや教材と直接関わる活動が主となります。保育の準備、片付け、子どもの主体的活動への参加、課題活動への参加などを通して、「指導・援助」の準備をします。なお、参加実習までを教育実習Ⅰ（1年生）のご指導の対象にしていたくようご配慮願います。

〔C 指導・援助〕

指導教諭のもと、日案を作成し、実習生が主体的責任を持って保育活動を行います。この「指導・援助」には、一日を通して保育する「全日指導」と特定の活動のみを保育する「部分指導」があります。原則的には部分指導から全日指導へと移行します。なお、この部分は教育実習Ⅱ（2年生）での指導内容としていただきますよう、ご配慮願います。



上記のように、本学では実習園へ文章にて配慮のお願いを行っている。本学の学生数は定員200名の規模にて一斉に1年次及び2年次にそれぞれ2週間の実習を実施しているが、各園での保育内容の実際の学びと学生が行う内容については実質的にはどのようになっているのだろうか。ここでは、特に領域の表現（造形表現の分野）に特化して、質問紙を配布し回答を1年次2年次の実習直後に記入させて分析した。

3. 実習における領域「表現」(造形表現の分野) 活動の実態

実際に実習中に学生の部分実習ではどのような内容がおこなわれているのであろうか。参考文献の中から1件と、先行研究の中から1件を抽出して以下に紹介する。表1. は、現在(2017)より37年前の先行研究で調査されたものではあるが、あえて時代をさかのぼって比較することが出来ることもあり抽出した。

表1. 部分実習でとりあげた活動

活動名	人数	統計別の人数
紙しばい	81	110
絵本	29	
お話	10	10
指人形	4	4
描画	30	81
切り絵、はり絵、版画	14	
製作	28	
折り紙	9	
ゲーム	33	48
指、手あそび	15	
歌唱、リズム、楽器あそび	50	50
体育あそび	44	44
その他	0	0

「保育所保育実習必携」p134,1986 川島書店発行
 小林一、井上肇編著
 学生数117名(昭和55年実施)による行った
 実数回の調査

表2. 指導案を提出して行った中心活動の調査

内容の分類	実施回数
図画工作に関するもの	188
体育に関するもの	102
図画工作と体育の混合表現活動	72
音楽と体育の混合	28
音楽と図画工作の混合表現活動	26
音楽に関するもの	13
音楽と図画工作と体育の混合	13
その他	12

保坂遊「実習における造形表現活動実施の実態調査」

2011,pp71-80 掲載による。調査実施の方法は、教育実習、保育実習ⅠⅡ、施設実習についての合計数である。2年生89名を対象にアンケートによる調査。於：聖和学園短期大学

上記の2つの調査では、調査人数から鑑みても、実際の実習中にどれだけの造形表現分野にて責任実習が行われたのかがわかる。表1のグレー網掛けの部分は、子どもが活動を行うもの。網掛けのないところは、保育者が演じて子どもは見えて受け止めるものである。比較にはならないが、子どもの主体的な保育活動で言うと、造形表現の活動量が抜きん出ている。表2では、子どもが保育者の発表を見て受け止める保育内容が調べられていないものの、音楽・図画工作・体育のそれぞれや、混合型での実施回数を見ても、造形表現の分野である図画工作に関するものが圧倒的に多いことが一目判明される。つまり、実習の責任・部分実習では指導案を提出して行われる内容において、造形表現の重要性を再確認出来る。37年前の調査と比較しても両者は教育実習にて造形表現を実行した比率が

相当高いのである。

それでは、本学の学生達はこれと比較して、どのようになっているのであろうか。以下、本学で本稿のために調べた結果を紹介する。

【調査の方法】

「1年次 教育実習 I」

- ・調査日時：2016年11月の教育実習 I（2週間）直後の授業（図画工作 I）にて実施
- ・調査人数：有効回答数 195 人（A クラス 49 人、B クラス 51 人、C クラス 45 人、D クラス 50 人）
- ・質問紙の質問事項①自分の担当クラス（年少・年中・年長）の回答と、そのクラスでの 2 週間に行った造形表現的内容の紹介の記述。②園全体での取り組みとして、作品展示や発表会での衣装や造形物などについて記入する。自分が手伝い、参加した内容についても記載する。③実際に自分自身が行うことができた活動（責任・部分）があれば記載する。

表 3. 1 年次教育実習のクラス担当

年少 クラス	年中 クラス	年長 クラス	縦割 クラス	合計 人数
79 人	51 人	50 人	15 人	195 人

表 4. 園全体での取り組み（のべ回数）

絵画的な活動	13
絵画と工作の混合活動	52
工作的な活動	64
行事・衣装・作品展	93
やっていない	4

表 5. 自分自身が行った活動（含：責任・部分）の内容（のべ回数）

活動	人数	責任・部分実習をした人数
絵画的な活動	7	51
絵画と工作の混合活動	0	
工作的な活動	44	
自由遊びでの造形・壁面	3	
行事の造形的な手伝い	20	
活動関連の手伝いのみ	40	
やっていない	78	
無回答	3	

1 年次の教育実習 I で、先述したとおり実習園には、【2017 年度（平成 29 年度）幼稚園教育実習指導に関するお願い】にて基本的に[見学・観察・参加]までということをお願いをしている。しかし実際のところは、表 5 の絵画的な活動や工作的な活動等で見られるように部分実習をさせて頂いている。大学に入学して 7 か月程しか学んでいない学生達は、どのような思いで実習に臨んでいるのだろうか。実習先では、他の 4 年制大学の人たちと

一緒に実習を受けていて、保育の学びの少ない短期大学生は、他大学の学生たちと同じ舞台に立ち、比較もされているのだ。

梅澤らは「どこの大学・短期大学においても、これまで保育内容科目の指導と実習先での園による指導とは十分な連関を持たないまま個々バラバラに行われてきた。」と指摘していて、「実習と教科目との連携を図って実践に移していくに際しては、極めて多大な精神的・肉体的労力が要求されることもあり、実習と教科目との連関は正面から研究の対象とされてこなかった。」とも述べている。「実習と関わる学生指導は、実習担当者を中心としたガイダンス的な事前指導や反省会的な事後指導のみが取り扱われていて、実習にも直接対応した各教科や領域を担当する授業の教育方法・内容に関する検討は見当たらない。」と提起していて、本学ではどうであるのか検証する項目に上がる必要性も感じている。1年次の教育実習Ⅰでは、見学や観察だけであると事前指導されていた学生が、実習が始まって責任・部分実習をすることになって、混乱しない訳がない。受け入れる園の指導担当にしても、他大学の学生たちとそうそう区別して受け入れてくれているのかも疑問であり、現実的には教育実習ⅠとⅡでは境界線が曖昧であり、厳密に区別せずに実習を行っているのかもしれない。現実を直視すれば、特に造形表現系の教員は、その専門性の学びを実習生に教授する必要があることを自覚しなければならないことが理解できる。

「2年次 教育実習Ⅱ」

- ・ 調査日時：2017年6月の教育実習Ⅱ（2週間）直後の授業（教育実習事後指導）にて実施
- ・ 調査人数：有効回答数195人（Aクラス50人、Bクラス48人、Cクラス47人、Dクラス50人）
- ・ 質問紙の質問事項①あなたは今教育実習では、何才児クラスにて実習を受けましたか。②あなた自身は責任・部分実習といったかたちで製作活動をされましたか？そしてその内容はどのような内容でしたか？自由に記述して下さい。それらを、文章や絵・図にして説明して下さい。③上記内容を行う際に、苦勞した事や大変だった事、大学の授業で教えてもらいたかったこと等を遠慮なく記入下さい。④その他、園全体での取り組みとして作品展や発表会での衣装や造形物などについても書いて下さい。

表6. 2年次教育実習Ⅱのクラス担当

年少 クラス	年中 クラス	年長 クラス	縦割 クラス	合計 人数
41人	74人	61人	19人	195人

表7. 自分自身が行った活動（責任・部分）の内容（のべ回数）

活動	人数
絵画的な活動	28
絵画と工作の混合活動	2
工作的な活動	131
自由遊びでの造形・壁面	0
行事の造形的な手伝い	0
活動関連の手伝いのみ	0
やっていない	34
無回答	0

表7.では、図画（絵画）や工作系統以外の活動の内容について質問をしていないが、学生数から鑑みても造形的な責任・部分実習をしている学生が大多数を占めている。この問いで、「やっていない」と回答した学生（34名）は、回答紙に32名が、造形関連以外の保育内容で責任・部分実習を行なったことを記していた。中には、このアンケートの造形的な内容を行ったほかに、責任・部分実習として、音楽的・体育的・遊び系等の活動を行っているのかもしれない。しかし、ここでは、造形的な活動についてのみ、どれほどの割合で責任・部分実習実施したのかを知ることを優先させている。数字を見る限りでは、1年次と同様に、いやそれ以上に造形表現系の保育内容が実質中心になって、責任・部分実習の内容を構成していると言っても過言ではない状況が判明した。

前項にて紹介した梅澤らの指摘のとおり、本学では現在のところ、この2年次の教育実習Ⅱの保育内容の実際を学ぶ造形表現系に関する授業が2年生前期には選択履修できるどころか、存在すらしない。実習と関連科目の連関については学生側から考えても、実質的な学びの流れにはなっていない状況である。事前指導で、もしくは造形系統の授業以外の他科目内にて、工作や絵画製作等も行われていて、その専門性については曖昧になっていてもそれを指摘する状況にもなっていない。保育者養成の短期大学では、規模にもよるが、このような実習と関連科目の連動の曖昧さの払拭は果たして行われているのか、ここでは明らかにできない。

4. 学生が願う学びたい保育内容

今研究の対象学生に取ったアンケートは、2016年度入学生の11月期と、同学生が2年

生になった6月期に回答されたものである。同一人物が1年次と2年次に回答していて、個人の実習後の振り返りとして検討することが出来る。まず、2年次のアンケート③の「行う際に、苦勞した事や大変だった事、大学の授業で教えてもらいたかったこと等を遠慮なく記入下さい。」について、未記入も散見されたが、気になる内容を抜粋して紹介する。

- ・「色々な色を用意したが、一斉に行ったらすごいことになった。時間がすごくかかる。」
- ・「作るとき、遅い子と早い子がいて、ペースがバラバラだった。説明するのが難しかった。」
- ・「子どもの前で実際に作って見せる説明の仕方とかをもっと大学で練習したかった。」
- ・「手順の説明をしたのにも関わらず、理解できず何も出来なくなってしまう子どももいる。」
- ・「発想の展開、広げ方が出来なくて、どう広げればよいのか応用・発展していけば良いのか教えて欲しい。」
- ・「どこまで私が作るのかということが迷いました。次の遊び方や動きを話したくても手元に見本のカエルがあって遊んでしまい、話を聞いてもらえるまで時間がかかってしまった。」
- ・「造形あそびのレパートリーをもっと知りたい。」
- ・「顔を描けない子への援助の方法。」
- ・「クレパスを上手に持てない子にはどうするの。」
- ・「年長さんでもハサミの使い方がわからない子が多い場合はどうするの。」
- ・「年齢に応じたことについて学びたかった。」
- ・「なかなか描き始められない子への教え方。」
- ・「子どもへのわかり易い説明の仕方がわからず苦勞した。」
- ・「固定観念にとらわれすぎないように説明する方法。」
- ・「すすめ方！始め方！あそび方！」
- ・「子どもの糊のつけ方や描き方がわからないのでどのように指導すれば良いのかわからない。」
- ・「見本を見て興奮してしまう子どもを落ち着かせることが出来ない。」
- ・「出来なくて泣いちゃう子への援助について。」
- ・「パレットとバケツを洗う時の大混雑への対処。」
- ・「難しく苦戦している子への対処。」
- ・「子どもたちの描く時間について。」

- ・「何色でもいいよって言っても、何色かわからない子のこと。」
- ・「作業に苦戦したり、飽きてしまう子がいてすごく悩みました。」
- ・「製作方法が伝わらず苦労した。」
- ・「クレヨンで描いたので、テープがくっ付かなかった。」
- ・「飽きてしまう子への対応がわからない。」
- ・「作り方の工夫について学びたい。」
- ・「園では子どもの製作物には手伝わない方針だったので難しかった。」
- ・「導入から製作・ゲームへの繋ぎの仕方。」
- ・「作業の速さに差が大きく出て、指示や援助に手が追われて大変だった。」
- ・「もっと身近な物で楽しめる活動。」
- ・「人数が多いと全体をなかなか見ることができない。一人一人は発達が違うので2週間では一人一人に合わせた援助をするのが難しい。」
- ・「イメージがふくらまない子への援助。」
- ・「製作」
- ・「色を強くぬりすぎて上手く色が出ないこと。色が上手くまざらない事。」
- ・「言葉だけでは伝わらないこと。」
- ・「子どもの行動、出来る、出来ないを予想することが難しかった。」
- ・「もっと製作が知りたい。」
- ・「どのように材料を準備したらスムーズに進んでいけるのか学びたい。」
- ・「アトリエの部屋について。」
- ・「製作するときの子どもの姿を学びたい。」
- ・「2年生でも造形の授業で学びたいです。」
- ・「普段からみんなで製作するという時間がないためとても不安でした。」
- ・「自由な絵を描いてもいいよって言ってもわからない。」
- ・「イメージが上手くまとまらず、描くことが苦手な子が描きやすいような説明。」
- ・「野菜を違う色で描いたり、描きたくないという子もいて戸惑った。」
- ・「時間を見ながらやっていたが大幅にオーバーしてしまって、実習生や先生がほとんどやった。」
- ・「苦労したことは、自分が見本を作ること。」
- ・「色の塗り方の子どもへの説明の仕方。」

以上が2年次の教育実習Ⅱを終えて事後指導の時間にて記入された内容の抜粋である。ほとんどの記入紙では、実際に責任・部分実習を行った際の苦労した部分やその反省などから何を学びたいのかという内容が見えてくる。つまり、実際に、実習にて活動をしていないと、次回は採用試験の時か、もしくは就職するまで子どもと向き合っただけの学びをすることが出来ないということになる。1年次にも造形表現的な実習体験をすることが出来た学生にとっては、1年次の反省をもとに、2年次では、できなかったことを踏まえて、改めて構想から準備、配慮すべき様々な事柄が想起できるというものである。1年次の実習は、「見学・観察・参加」ということではあるが、それを飛び越えて「指導・援助」まで、実際に経験を積むことができた学生にとっては良かったのかもしれない。また、その逆で、1年次に全くしなかった学生についてはどうであろうか。造形表現分野での見学・観察さえもすることができていなければ、他の学生と比較しても心配と言わざるを得ない。ここで、1年次の教育実習Ⅰの回答紙に、「やっていない」と回答した78名を追跡して2年次の回答紙を並べてみると、7名が2年次の教育実習Ⅱでも行っていないことが判明した。但し、これらの学生は自ら記入紙に記入を拒否して書かなかったことも考えられる故、追及の余地はないが、残念であることは間違いない。学生のコメントには、実習生には手を出してもらいたくない場面もあって、観察のみにして欲しいというふうに指導されたという場面も散見される。やはり、受け入れる園としても、そこでご指導下さる先生方の指導方法や流れに未熟な実習生が入り込むことに、懸念するという事は容易に想像できる。

1年次に部分実習などをした経験のある学生は口々に、1年生のうちにやっておいたほうが良かったということを言う。それは、実際に経験を積まなければわからないことが多いということである。実習園の懸念はよそに、経験させて頂いた学生にとっては良かったのかもしれない。

5. 保育者が養成校へ望むこと

学生が学びたい造形表現の内容に触れたところで、今度は実際に現役保育者から学生や保育者養成校の指導内容に関して望むことを紹介する。今年度の幼稚園教員免許更新講習に参加された70名にアンケートをお願いして、自由記述にて回答をいただいたので抜粋して紹介する。質問「現在、保育者として足りないと思うことや、保育者養成校へ望むことはありますか？何でも書いて下さい。」2017年7月16日実施

回答の抜粋

- ・「入園式後すぐ、5,6月の母の日、父の日用の、お母さんお父さんの顔を描かなければならない。どのように指導するのか、学校で学べたら良かったと思う。」
- ・「子どもの絵から、どんな心情だとか分かるといいなと思います。」
- ・「造形を素直にとらえる心。仕上がりをきれいに整えることにとらわれすぎて、子どもらしい表現を大切に出来ない所が残念です。」
- ・「何か作成するにも型がないと上手く作れない！と思う学生さんが多い。見た目の可愛さ、きれいさも大切であるのかも？でも色々な遊び方を知り、楽しんで参加できる、これを大切にしてほしい。」
- ・「子どもの発達に応じた題材の選択、材料の選択、指導方法。」
- ・「作品展や壁面製作で活用できる立体的な造形・魅せ方を知っておくと良い。」
- ・「創造力が豊かであること。アイデアが豊かであること、苦手意識を持たないこと。」
- ・「絵の具1つにしても、道具や遊び方で様々な遊びに発展する。年齢によっても発達差があるので、各年齢における遊びの具体例をたくさん知っておくと即使うことができると自分自身の経験から思います。」
- ・「就職してすぐに、誕生日表や壁面12か月分を作る仕事がありました。短大の時に少しでも練習しておけば良かったと思いました。」
- ・「子どもたちに、どのように活動させていくかを考えられる力を伝えて欲しいです。何が必要？全員に伝わるにはどんな説明？とか。」
- ・「自分自身のイメージを形にすること。手作りおもちゃ等を作る際にも、手先の器用さやどうやったら月例に合ったおもちゃを創れるか、雑誌等を見て知っておくことも大事。」
- ・「現在足りないと思うことは、色々なアイデアを生み出す柔軟な考え方、幅広い知識が足りないと思うので、そのようなことを教えて頂きたいと思います。」
- ・「技法や素材の特性をバリエーション豊かに知っていることが必要だと思う。」
- ・「上手に描かなければいけないように考えてしまったり、それを子どもに求める事になるよりも、思いを自由に表現することの大切さを知って欲しい。」
- ・「絵を描くときに、特徴を上手にとらえられるようになると良いなと感じます。」
- ・「子どもにルールとかボードを使って説明する時に図が描けない。図の構図とか、わかり易い図での説明。」

- ・「子どもの発達的な面からみたアプローチと大事にしたい楽しい内容について。子どもの表現、作品に対しての声のかけ方。」
- ・「製作における子どもへの指導・言葉掛けの教え方。」
- ・「子どもが見てもわかりやすく明るい絵が描ける能力。子どもに親しみのあるキャラクターを表現する練習。」
- ・「発想がかたい先生が多いので、常日頃から環境に目をつけ、廃材など資材に注目して製作が出来るような造形活動を、もっと知れる機会があるといいと思う。」
- ・「想像力と創造力が豊かな保育者になれるようにして欲しい。」
- ・「子ども達の発想を表現できるように、保育者がこたえてあげられる。そしてさらに発展した表現ができるように導いていく。言葉がけや材料の準備、その場ですぐに対応できる能力が必要だと思います。」

6. 学生の思いと保育者の望む思いの関連

学生と現役保育者の思いを繋げる作業を次に行うのだが、何が共通で何が違う事なのかを明らかにしてみる。まず、学生の学びたいと願う内容を整理すると、まずは、教師が子どもへどのように説明し活動を支えるのか、「①子どもへの製作手順などを含む指導法について。」である。その次に、子どもたちに説明して伝わったと思っても、大切なことが理解されていなかったという事が多々報告されていて、「②保育者の子どもの理解・援助の方法」である。その次は、学生自らの製作する能力であった。「③保育者の造形能力（スキル）」これについては、保育者養成校へ入学して久しぶりに造形の授業に出て感じるのは、絵を描いたり工作をしたりすることは大変であると思いつつ、中学校の美術科に比べて、ずっと簡単ですぐに出来るという意識が、造形的スキルの必要性を他より低く要求していることもわかった。そして、造形活動の準備・段取りから、その製作活動の展開・発展について考えることが悩みの種としても上がっている。「④準備・段取り・展開・発展について。」

また、現役の保育者が思う、学生や保育者養成校への期待する事柄や保育者自身も学びたいと思っている事柄を探ってみた。そうすると、子どもへ指導する際にわかり易い図や見本などの描き方をもう少し大学時代に学んでいれば良かったという思いから、子どもへの見本や説明の際の絵や図が描けるようになりたい願望が相当多く回答されていて、「①保育者の造形能力（スキル）」ということが筆頭になる。次に、子どもの発達に応じた材

料や素材の知識を知って、何が出来るのかを考える力や指導方法の学びが足りないとの指摘も多い。「②材料や素材の研究と指導の方法」があがっている。次には、子どものことを理解して、どのように声を掛けて、どのように進めていくのかという理解が足りないという指摘も少なくない。また、イメージを形にする際の方法やアイデアを出す際の柔軟な導入方法や製作の方法を考える力、それを伝える力も望まれている。「③イメージやアイデアの具現化と導入・伝達方法の学び。」

このように整理して言葉にしてみると、保育者と学生が共通して学びたい必要な事項は、共通しているものの必要として考えている優先順位については違いが見られたことは驚きである。現役保育者は、自らの造形的スキルへの劣等感を抱き、学生へもその学びを要求していることがわかる。また、学生は子どもの理解・援助や指導の方法に迷いを感している。保育経験の少ない学生は、子どもとの関わりが少ないということであり、実習に出向いて初めて子どもと接することになる。よって、簡単な子どものする製作については、作る作業自体は元々子どもが行う造形活動なので簡単であり自分にもできるので現時点では、そう心配はしていないのである。心配なのは、自分が作るということよりも、それをどう指導すれば子どもが理解して行うことに繋がるのかと言う指導法である。自分が作るという作業と子どもへ伝えるという指導法は、ここではリンクしていない。

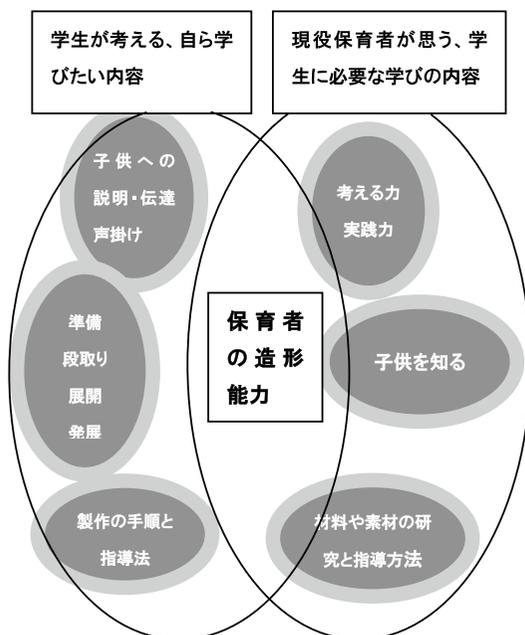


図1. 表現（造形）活動に必要な保育者のスキル

造形活動は、絵本や紙芝居を見るという子どもの受容的な保育内容ではなく、子どもの主体的な自らの活動を促す保育内容である。描いたり造ったりすることは、保育者自身がその意味を理解して造形の基礎をマスターする必要がある。現役保育者の思いとしては、基本的な事項であるが、やはり「保育者としての必要な造形的基礎技能」について学びたいということが明らかである。これは、材料や素材を知った上で、それをどのように扱い、保育に活かすためにも自らが製作をすることが出来るということである。学生も保育者も、この部分については、多くの必要性を訴えている。子どもを知って、子どもの思いが理解出来て、子どもに寄り添い、援助や指導の方法を知るという保育者のスキルが大きくクローズアップされている時代ではあるが、保育者の基礎技能である、造形的スキルについては、その必要性について強調されている文献は見あたらないのである。しかし今研究で見えてくる学生や現役の保育者からの生の声として、描いたり作ったりする能力が保育に必要であることを改めて知ることができ、保育者養成校で教授すべき内容を再確認することができた。

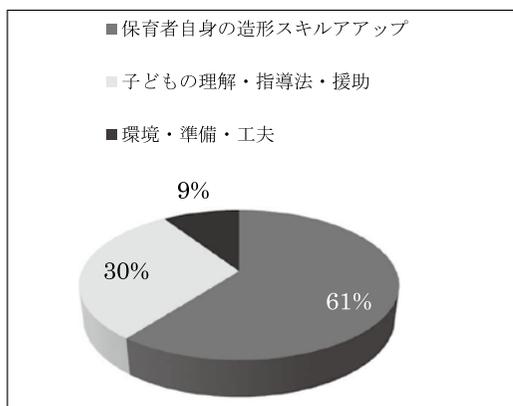


図 2. 現役保育者が思う学生に必要な学び・自ら学びたい内容

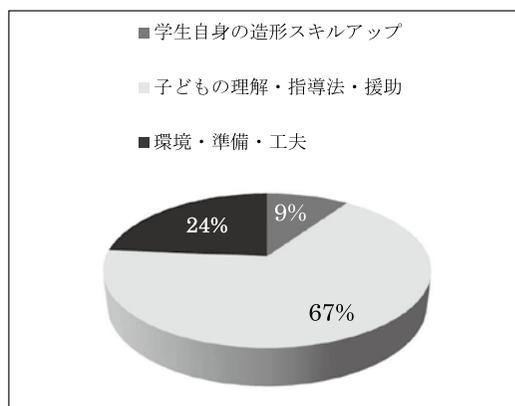


図 3. 学生が考える自ら学びたい造形表現内容

筆者は昨年度、大学生から現役の保育者までアンケートによる調査を行った。図 2. と図 3. では、大学生と現役保育者がそれぞれ学びたいと思う造形表現に関する内容の順位の%をグラフ化したものである。これらのグラフでは、両者の学びたいと思う項目の順位に違いがあることが一目瞭然となっている。現役の保育者は、学びたいと考える筆頭に「保育者自身の造形的な技術力の向上に関する内容」であった。現役の学生たちは、まず学びたいことは、「子どもの理解から援助の方法や指導法」となっている。

また、「お絵かき」に対するそれぞれの意識の違いも読み取ることが出来た。図4.のグラフを見れば明らかであるが、学年が上がる、もしくは年齢が上がる、保育の経験を積むほどに、お絵かきのことを自身が好きという比率が下がっているのだ。筆者の調査では「短大1年生から大学4年生、現役保育者と年齢が上がり、保育についての学びも習熟し、実際の保育経験も積んでいるにも関わらず、年と共に次第にお絵かきをする能力に必要性を強く感じているという事実が明らか。」ということもわかり、「新しく新任で就業している保育者よりも、主任や園長に至るほど、お絵かきには苦手意識を強く持ち、その劣等感や嫌悪感からお絵かきの能力が必要であるという考えが強い。」という結論付けもしている。

現役の保育経験者は、保育の方法に関しては熟達していくが、自身が絵を描くことに関しては熟達されず、逆に劣等感が増しているようである。そういう理由が見えてきたところで、熟達された保育者が、子どもの前で、または子どもに見せる見本の絵や工作についての学びが改めて必要だと思うことについては、いささかの疑問も湧かない。それは、当然であると言えよう。

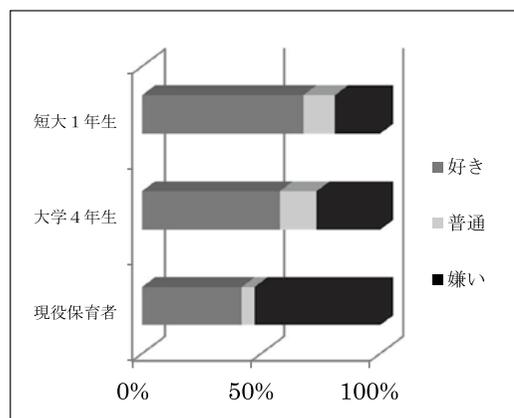


図4. あなたはお絵かきが好きですか？の意識調査

松下明生「保育者に必要な造形能力についての研究」名古屋柳城短期大学研究紀要 (No.38) 2016pp.93-102

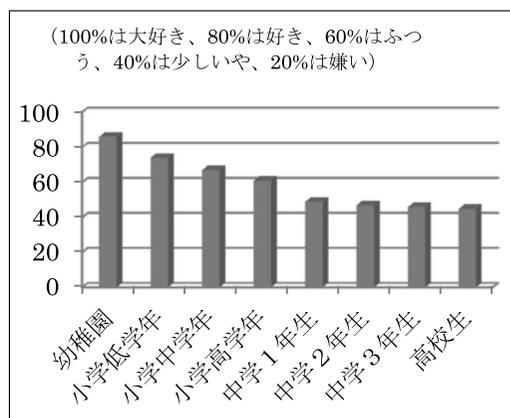


図5. お絵かきの好きな割合 (%)

松下明生「子どものお絵かきの嫌いになるとき」浜松学院大学短期大学部研究紀要 No.8 (2012) pp.31-48

図5.のように、子どもの頃はお絵かきが大好きであったのが、グラフから読み取ることが出来ることは、次第に確実にお絵かきが好きではなくなっていく子どもが増えているということである。幼児期から小学校期を経て、中学校で美術という科目になり、この中学校義務教育で必修の美術教育が終わる。次第に、あれほど好きであった図工や美術は、

好きと回答する比率が減ってしまい、好きという生徒は半数を割ってしまう。高等学校に於いては、芸術選択にて美術を学ぶ機会も激減する。保育を目指す学生においても、高等学校では音楽選択者が多く、大学に入学して久しぶりに絵を描いたり工作をしたりして困惑する学生も少なくない。しかしながら、保育者養成校に入学して間もない頃は、まだ10代の若者である。子どもの頃に描いた絵についても、それほど時間が経ってしまっている訳でもない。入学後の造形表現や図画工作の授業にて、しばらくして直ぐに、お絵かきの楽しさや工作の魅力を引き出して授業を受ける学生が殆どである。

大学生という造形表現を必修で学んでいる学生は、お絵かきを学んでいる真只中であり、絵を描くことに対して、それ程の抵抗はないようである。実習前後の学びの必要性として感じる思いは、絵を描くことよりも、未体験ゾーンである「子どもの理解・指導法・援助」の学びが必要であると思うことは必然的であるということになる。

その逆で、現役保育者について言えば、子どもたちに活動として表現活動の指導・援助は行うものの、実質的には自分で絵を描く機会が減ってしまっていて、自分自身が絵を描くという作業については億劫になってしまっていることがわかる。保育者の絵を描く技術に進歩が無くても、毎日の実際の保育経験によって、言葉掛けや指導力が卓越すれば、子どもにお絵かきを楽しく促進させることができるということなのだ。

先述したが、短期大学生や大学生よりも、現役保育者のほうが自分自身はお絵かきをすることが好きではないという人の割合が高いことを筆者は昨年度の調査から報告している。それは今回の調査での学生や現役保育者の自由記述からも読み取れる。「保育経験を積んで、子どもの理解が深まり、声掛けや援助の方法、指導法について熟達されていくのではあるが、自分自身の絵を描くという行為に関しては苦手意識が高まっている。」ということが告白されている。つまり、自身の苦手意識の所在がどこにあるかによって自分自身が改めて学びたいという内容が決定していくのだ。そしてそれぞれの学びたい内容は両極にあるようにも見えるが、そうではなく現役の保育者が学生や保育者養成校へ向けて期待する造形表現の学びや教授内容については、学生への学んで欲しい内容としてリンクされていて、相関関係が存在していることも分かった。

7. まとめ

今研究は、造形表現について、教育実習での実態調査から見てきた内容と、現役保育者が感じている学生の学び足りない所や、保育者自らが改めて学びたいと考える内容と照

らし合わせて考えることを初めて行った調査研究である。

教育実習を受けた直後のアンケートによってわかったのは、学生は自分たちの保育の能力の未熟さを痛感し、保育の方法や指導の方法など子どもと向き合っ初めて何が自分たちに足りないのかを理解し得たということである。一方、現役の保育者は学生とは違う立ち位置ではあるが、自身の苦手意識のある領域や自身の表現（造形）能力などに関して、自分自身も学びたいと思うし学生へも学んで欲しいと思う、ということが判明している。

教育実習での内容としては、表1の実数を改めてカウントしてみても、何十年経っても、実習での保育内容は大きく変わっていない状況が読み取れる。あくまでも学生の実習内容でのことではあるが、領域「表現」（造形表現の分野）の活動が、様々な保育内容の中でも大変に重要な位置にあって、そしてそういうことを改めて認識して、学生に実践研究を深めさせていくことが、教育実習のためのみならず大切な保育者養成校の役目のひとつであることを追認することが出来たと考える。

短期大学の実習では、1年次2年次とそれぞれ学ぶ内容や到達の目標、評価の基準などに差異を設けているのだが、実際の実習では部分・責任実習などの実施内容には実習ⅠとⅡの内容が混在している場合も少なくないことが判明した。よって、保育者養成校のそれぞれの科目担当や教授内容等については、実際の実習での内容を理解して、そして学生が混乱しないように、出来る限り事前事後のフォローアップを行う必要があることも分かった。繰り返すが、短期大学での教育実習ⅠⅡの内容の通りの通りではない実態を理解して、養成校での学生の学びの内容を改めて考える必要性があるということである。

保育者養成校に限らず、小学校や中学校の教員養成校でも実習の担当者のみが実習指導を行っている訳ではないし、させているのでもない。限られた領域の担当者のみならず、養成校の授業者のすべてで、幅広く学生の学びの連携を持ち、学生の学ぶ機会や内容に柔軟に対応し支える必要があるのだ。

参考・引用文献

- ・教育職員免許法及び教育職員免許法規則（教員免許種認定関係条文抜粋）
- ・小林一、井上肇編著（1986）「保育所保育実習必携」川島書店 p.134
- ・坂保遊「実習における造形表現活動実施の実態調査」聖和学園短期大学紀要（48）2011.pp.71-80
- ・梅澤ら「実習と連携した保育内容科目（造形表現）の教育内容・方法の在り方について」

美術教育学会誌 2002.No284,pp.2-12

- ・ 甘日出里見「保育者養成という現場の日常」教育社会学研究 2011.Vol.88,pp.65-86
- ・ 小川清美編著「幼稚園実習」2006. ななみ書房
- ・ 民秋言ら編「保育所実習」2009 北大路書
- ・ 太田光洋編著「幼稚園・保育所・施設実習完全ガイド」2015 ミネルヴァ書房
- ・ 松下明生「保育者に必要な造形能力についての研究」名古屋柳城短期大学研究紀要 (No38) 2016,pp93-102
- ・ 松下明生「子どものお絵かきの嫌いになるとき」浜松学院大学短期大学部研究論集 No8 (2012) pp.31-48

A Study on the Teaching Method of Art and Craft at a Kindergarten Teacher Training College

Matsushita, Akio*

短期大学や四年制大学の教育実習に際しては、実習担当者の指導の下に様々な取り組みが行われ、学生達は、教員になるための学びを享受している。教育実習の中身としては、観察実習から見学・参加・援助・指導などと園や学校で幼児や児童・生徒と関わり、教育者になるための学びを経験習得している。造形表現の学びに於いても、責任実習・部分実習として学生は指導案を書き、実際に授業を行うことをする。短期大学等に於いては、実習をⅠとⅡ等と分けて行っているところが多い。実習で学ぶ内容は、ⅠとⅡで内容や項目を変えて実施のお願いをする。ところが、実習園では区分を明確にせずにⅠであってもⅡの内容にまで行う場合が少ないということを調査した。その事実をもとに、保育者養成校では、学びの内容や事前の指導等についても各教科目との連携をはかって、十分な学びを保障し、より良い実習になるべく調整と授業構成等への再考などをする必要性などを説いている。教育実習Ⅰでは、体験・見学・参加までとした内容から、Ⅱの内容までの広がりを見せている園が殆どであることを認識する必要性についても説いている。

キーワード：幼児教育・造形表現・教育実習・図画工作・造形能力